

【學術論文】

『法華伝記』の撰者と成立年代について

市岡 聡

はじめに

『法華伝記』は、『法華経』の由来、伝訳、靈驗等に関する事跡を、部類増減、隠顯時異、伝訳年代、支派別行、論釈不同、諸師序集（以上、卷一）、講解感応（卷二―三）、諷誦勝利（卷四―六）、転読滅罪（卷七）、書写救苦（卷七―八）、聴聞利益（卷九）、依正供養（卷十）の十二科に分けて記述したものである^①であり、「とくに『法華経』の講解・諷誦・転読・書写・聴聞・供養にまつわる各人の事跡や靈驗談が詳しく述べられている点に本書の特色がある^②」とされる。「法華経伝記、法華経伝、唐法華伝^③とも呼ばれており、大正新脩大蔵経第五一卷史伝部三（大正蔵二〇六八）と新纂大日本統蔵経第七七卷（統蔵一五三八）に収められている。大蔵経は、慶長五年（一六〇〇）刊大谷大学蔵本を原本とし、校本を東大寺蔵古写本とする。その他の諸本として、慶長十九年（一六一四）刊のものが、叡山文庫中の天海蔵、大谷大学、大正大学及び龍谷大学にあり、寛永三年丙寅（一六二六）京都

本能寺開判のものが、真如蔵（天津市坂本町、実蔵房）にあり、承応元年（一六五二）舜興写のものが、正教蔵（天津市坂本町・西教寺内）にあるとされている^④。また、名古屋市にある大須真福寺宝生院にも所蔵されているが^⑤、真福寺本は一、二、九及び十巻を欠く。

『法華伝記』は、長久年間（一〇四〇～一〇四四）に首楞嚴院沙門鎮源によって編まれた『大日本国法華経験記』に強い影響を与えており^⑥、また、『百座法談聞書抄』や醍醐寺蔵の源西撰『探要法華伝』にも話が引用されていて、日本では比較的著名な書であったことが窺われる。しかし、『法華伝記』についてはわかっていたことは少なく、いつ誰の手によって編まれたのかははっきりしていないのが現状である。本稿では、『法華伝記』の撰者と成立年代に関する問題について検討した後、内容や引用関係について論じていきたい。

一 撰者

『法華伝記』の撰者の記載について、大蔵経は「唐僧詳撰」とし、統蔵経は「唐慧詳集」とする。羽溪了諦^⑦は、撰者を「祥」とし、玄宗及び肅宗時代（七一二～七六二）の人とする。僧は、名前の下の一字だけをとって呼ばれることが多く、「祥」という撰者名もその例であろう。このような例は枚挙に暇がなく、『法華伝記』本文にも「道生」を「生」、「玄朗」を「朗」とする。つまり、羽溪は、『法華伝記』の撰者を「某祥」という名であると考え、下の漢字だけとって

「祥」としたのであろう。小笠原宣秀³³は、本書の撰者を『古清凉伝』、『弘誓法華伝』及び『釈門自鏡録』の撰者である「慧詳」とするが、伊吹敦³⁴は小笠原説を否定し、慧祥とは異なる人物とするが、積極的に誰であるかは明記していない。鎌田茂雄³⁵は、僧詳とする説に立つ。このように、「某祥」とする説、「慧詳」とする説、「僧詳」とする説の三つがあり、僧詳説が多くの支持を得ている。

僧詳とする説は、日本人僧釈円智が慶長五年（一六〇〇）三月十五日³⁶に記した『法華伝記』跋文の「唐僧祥公」（大正蔵二〇六八 九七上。以下『法華伝記』の引用は、大正新脩大蔵経の頁数と段数のみを記載する）を「唐の僧祥公」と読んだのが理由と考えられる。しかし、『法華伝記』「諸師序集第六」の「法華経序」に円智が書いた文と考えられる「余嘗見蔵経。隋法経撰衆経目錄第六云。妙法蓮華経序一卷釈慧遠。出三蔵記第十二卷云。妙法蓮華経序釈慧遠云云皆不載序文。蓋祥公依之乎。」（五四上・波線は筆者）という一文があり、波線部分は、「蓋し祥公これに依るか」と読める。『法華伝記』の本文中には、数回「祥」という文字が登場しており³⁷、円智はこれらの「祥」という表現を見て『法華伝記』の撰者を「祥」としたのであろう。つまり、跋文の「唐僧祥公」は「唐僧の祥公」と読むのが妥当であり、「唐の僧祥公」と読むのは妥当ではない。なお、本稿では『法華伝記』の撰者をいう場合、「唐僧祥公」と呼ぶこととする。

小笠原は「詳」と「祥」の違いについて、「後漢の訳経沙門康居の康孟詳は或は康孟祥と書き一定することを得ぬ」という具体例を挙げ

て「總じて支那では詳字祥字は混用することが多」とし、議論上の混乱を避けるため、先学の例に従い「詳」字を採ったとする³⁸。確かに、反切は『集韻』によると、「詳」も「祥」もともに「徐羊切」とされ、全く同じ発音である。また、『説文通訓定聲』によると、「詳」は「詳、假借為祥」とされ、「祥」は「祥、假借為詳」とされて、意味の上でも通用しており、どちらの文字を使っても差し支えないように思われる。しかし、『法華伝記』で唐僧祥公は自らのことを「祥」と言っていて、いくら音通で假借可能とは言え、「詳」字を用いることは適切ではない。『法華伝記』の撰者名は「祥」字を使う方が妥当であろう。

次に、唐・神龍二年（七〇六）以後に成立したとされる『弘誓法華伝』の撰者「慧祥」との関連を見てみたい。羽溪³⁹は体裁や質・量的にも差異が大きく、同一人の撰とは言い難いため、『弘誓法華伝』と『法華伝記』の撰者は別人とする。小笠原⁴⁰は、一旦は『法華伝記』撰者を『弘誓法華伝』撰者である藍谷沙門慧詳に比定するが、筆法の異なり等同一人物とし得ない点もあり、「斯の如くして『法華経伝記』著者は今日に於いては藍谷沙門慧詳と断定することは許されないもので、結局は疑問とする外はないと思ふものである」とする。伊吹⁴¹は、『弘誓法華伝』と『法華伝記』との共通の話を比較し、『弘誓法華伝』において慧祥の資料の取り扱い方に見られる独自性と、それが『法華伝記』に見られるかを考察し、「全く『弘誓法華伝』に見られた慧祥の独自の立場が見られないのであって、このような諸点よりするに、

内容から見る限り、この問題に関し『法華伝記』を慧祥の著作と認めることは、到底、不可能と言わざるを得ない」とする。小笠原は疑問とするが、他の二氏は『法華伝記』撰者と『弘誓法華伝』撰者とは別人であるという立場である。『法華伝記』の「諷誦勝利」に掲載する僧の人選を見ると、『法華伝記』は『弘誓法華伝』から大きな影響を受けていることは事実である⁵⁷。しかし、文章の引用を見てみると、『弘誓法華伝』よりも『高僧伝』や『続高僧伝』の内容を基礎にする傾向にある。この点から見ても、やはり唐僧祥公と『弘誓法華伝』の撰者の慧祥は別人であると見た方が妥当であると考える。

以上、『法華伝記』の記述に従うと、『法華伝記』の撰者は「僧詳」とするのは妥当ではなく、また、『弘誓法華伝』の撰者の「慧祥」でもなく、唐代の僧である「某祥」とするのが最も妥当であると考える。「唐僧祥公」とは誰なのかは現時点では不明であるが、円智の跋文の評価を借りるなら、「博聞達識之人」（九七上）であった。また、法華経に対し強い信仰心を持っていた人物であることが本文中の記述から推測できる。つまり、聴聞利益「貞観鶴児五」は『弘誓法華伝』からの書承であることが確認できるが、『法華伝記』には文末に「鳥聞経尚成人身。況人情乎」という一文が付加され、同じく『弘誓法華伝』と書承関係にある「南陽僧法朗犬十三」では「後猴犬死。有人夢。猴犬是朗宿世朋友。聞法華故。捨寿命生天。畜生尚狎持経者。聞誦経声生天。況人乎」とある。これらの文章は、唐僧祥公が法華経信仰の功德について強調しているところであり、あえてこれらの文を付加してい

ることを鑑みると、唐僧祥公は強い法華経信者であることが推測される。

また、『法華伝記』には多数の僧侶の伝が書かれているが、他宗に比べ天台宗に関係のある人物を多く選んでいる点に特徴があり、「化三乘人。開悟一乘」（四九中）という表現を使用し、声聞と縁覚を導いて一乗の悟りを開かせるという内容を殊更に述べている点や、「体具」⁵⁸（四九上）という天台宗にとって非常に重要な教義である一念三千に深く係る語を用いている点、さらに、後序偈頌において「鹿言細語婦中道」（九七上）とあり、これはまるで「空仮中」の「三諦」や「従仮入空観」「従空入仮観」「中道第一義観」の「三観」が前提になる文章に思える点を鑑みると、唐僧祥公は天台宗の僧であった可能性があるが、あると考えられる。

二 一 成立年代

成立年代に関する有力説は、羽溪の説く天宝（七四二―七五六）末年頃の成立という説である⁵⁹。その理由は「天台第八祖玄朗の事は記してあるけれども、天寶の末から漸次名聲を揚げた、天台第九祖湛然の事蹟を缺いてをるから」としている（羽溪は天台九祖説を採用しているが、天台六祖説が一般的なので、本稿では六祖説を採用する。したがって、玄朗は第五祖、湛然は第六祖となる）。確かに玄朗（六七二―七五四）の記事は『法華伝記』に「唐左溪釈玄朗五」（五八上―

中)として書かれており、湛然(七一一―七八二)の記事は書かれていない。しかし、『法華伝記』に書かれている第五祖以外の天台六祖は、第二祖慧思(五九上―中)、第三祖灌頂(五七中)、第四祖智顛(五六下―五七上)であり、第一祖慧文が書かれていないので、記述を欠くから湛然以前という羽溪の主張は、いまひとつ説得力を欠くと言わざるを得ない。

『法華伝記』は多くの文献から文章を引用しているが、成立年代を考える上で次の二文献からの引用が重要である。一つは、「序」の一部と「論釈不同第四」に引用される智昇撰『開元釈教録』である。

なお、本稿において引用関係を記載する場合、丸付き数字以下に『法華伝記』の科名、頁数、段数及び該当箇所の文章を書き、矢印以下で出典となっている文献の著者名、書名及び引用箇所を示し、双方に共通する表現には傍線を引くこととする。

①『法華伝記』序(四八下)

「我撰經典護法城 哀愍覆護願加威 法灯不斷長夜照 迷者因此得仏慧」

↓智昇『開元釈教録』(大正蔵二一五四 四四七上)

「我撰經錄護法城 三寶垂慈幸冥祐 惟願法灯長夜照 迷徒因此得慧明」

②『法華伝記』論釈不同(五三上)

「釈其大義。中印度沙門勒那摩提。魏云宝意。学識優瞻理事。兼通三藏。凡誦一億偈。偈有三十二字。意存遊化。以宣武帝正始五年

戊子。初屆洛邑。訳法華論爲一卷。侍中崔光沙門僧朗等筆受。当翻經日。於洛陽内殿。菩提流支伝本。勒那扇多參明其後。三德乃徇流言。各伝師習。不相詢訪。帝以弘法之盛。略叙曲煩勅三處。各翻訖乃參校其間隱没。互有不同致者。文旨時兼異綴。後人合之。共成通部。又北印度沙門菩提流支。此云道希。新云覺愛。遍通三藏。妙入總持。志在弘法。広流視聽。遂挾道胥征。遠莅葱左。以魏永平之歲。至止東華。宣武下勅。懇懃敬勞。後處之永寧大寺。供侍甚豊。七百梵僧。並皆周給。勅以流支。爲訳經之元匠也。」

↓『開元釈教録』(大正蔵二一五四)

「沙門勒那摩提。或云婆提。魏言宝意。中印度人。学識優瞻理事兼通。三藏教文凡誦一億偈。偈有三十二字。尤明禅觀意存遊化。以宣武帝正始五年戊子初屆洛邑。遂訳法華論等三部。沙門僧朗覺意侍中崔光等筆受。当翻經日於洛陽内殿。菩提留支伝本。勒那扇多參助。其後三德乃徇流言。各伝師習不相訪問。帝以弘法之盛略叙曲煩勅三處。各翻訖乃參校。其間隱没互有不同。致有文旨時兼異綴後人合之共成通部。見宝唱等録」(五四〇中)

「沙門菩提留支。魏言道希。北印度人也。遍通三藏妙入總持。志在弘法広流視聽。遂挾道胥征遠莅葱左。以魏永平之歲至止東華。宣武下勅懇懃敬勞。後處之永寧大寺供侍甚豊。七百梵僧並皆周給。勅以流支爲訳經之元匠也。」(五四一中)

この引用関係を見ると、『法華伝記』が『開元釈教録』を見ていることに間違いはない。『開元釈教録』は開元十八年(七三〇)に成

立^⑤しているため、この引用から『法華伝記』は開元十八年以降の成立であることは確実であるといえる。

二つ目は、「序」で引用される湛然著『止観輔行伝弘決』である。

③『法華伝記』序(四八下)

「諸同遇者生慶幸 世世恒聞能修行 乃至見聞讚毀者 順逆俱

證無生忍(中略) 抑祥宿殖所資妙因斯發。流通一乘。讚詠真文。目

聞未聞。耳見未見。昔始自姚秦訪道。」

↓湛然『止観輔行伝弘決』(大正藏一九二二・二二六中―下)

「今運居像未囑此真文。自非宿植妙因誠為難遇況十乘十境出自一

家。(中略) 如其所計豈知凡有所說咸混願諸同遇者深生慶幸心冀來

世重聞 早契無生忍」

『止観輔行伝弘決』の最終版が完成したのは永泰元年(七六五)な

ので、『法華伝記』の成立は永泰元年まで時代が下ることになる。

確かに、『開元釈教録』からの引用とは異なり、部分的な引用ではあ

る。しかし、双方の類似は明らかであり、これらの表現が他の文献に

はないものであるという点を鑑みると、『法華伝記』の成立を永泰元

年以後と見ても大過ないのではなからうか。

さらに、湛然著『法華文句記』には「宿殖所資妙悟斯發」(大正藏

一七一九 一五一中)という文章があり、『法華伝記』序の「宿殖所

資妙因斯發」と著しく類似した表現である。『法華文句記』は大暦九

年(七七四)以後の完成と考えられていることから^⑥、さらに成立年

代は下ることになる。

唐僧祥公は湛然の著作を目にしていた可能性が高く、羽溪の説く湛然の記事がないから天宝末年成立という有力説は成立が困難であると考える。『法華伝記』が『開元釈教録』から引用しているは明らかであり、『法華伝記』は『開元釈教録』が成立した開元十八年(七三〇)以後の成立が確実である。さらに、湛然著の『止観輔行伝弘決』と『法華文句記』からの引用も認められるため、『法華伝記』の成立年代は『止観輔行伝弘決』が成立した永泰元年(七六五)、または『法華文句記』が成立した大暦九年(七七四)まで下る可能性が高いと考え

三 内容と引用関係

『法華伝記』は、『法華経』の由来、伝訳、靈験等に関する事跡を、十卷十二科に分けて記述しており、『法華経』の講解・諷誦・転読・書写・聴聞・供養にまつわる各人の事跡や靈験談が詳述されている点に特色があり、講解感応以降は僧伝の形式を採っている。的場慶雅^⑦によると、それぞれの話の時代とその話数は、晋が十一件、魏が三件、宋が二十件、齊が十三件、梁が八件、陳が七件、隋が三十件、唐が五十九件とする。講解感応から依正供養までの話数は二百話あり、的場の勘定は合計で一五一件にしかならないので、どのような勘定をしているのかは不明であるが、隋唐代の話が多数を占めることはわかる。

『法華伝記』の配列は、順に「部類増減、隠顕時異、伝訳年代、支

派別行、論釈不同、諸師序集、講解感応、諷誦勝利、転読滅罪、書写救苦、聴聞利益、依正供養」の十二科である。この配列は、唐・嗣聖七年（六九〇）に成立した法蔵撰『華嚴経伝記』の「部類、隠顕、伝訳、支派、講解、諷誦、転読、書写、聴聞、雑述」と類似しており、配列順序に関して『法華伝記』は、『華嚴経伝記』の影響を受けていることがわかる²⁴。『華嚴経伝記』との相違点として、『華嚴経伝記』は行業だけを表しているが、『法華伝記』は行業の下にそれを修飾する語を付けて四文字で表現し、各科にどのような内容が書かれているのかをわかりやすくしているものと思われる。つまり、「部類は増減す、隠顕は時により異なる、伝訳の年代、支派と別行、論釈は同じならず、諸師の序の集、講解による感応、諷誦による勝れた利、転読による滅罪、書写による救苦、聴聞による利益、依正による供養」と読むことができる。なお、『弘誓法華伝』は「凶像、翻訳、講解、誦持、転読、書写、修観、遺身」であり、部分的に一致するが、『法華伝記』とは異なる配列順序である。

『法華伝記』には各話の文末に割注で出典が記される場合がある。出典として記載されているもので最も多いのは、『梁高僧伝』（二十件）であり、次いで『統高僧伝』（十六件）が続く。その他の出典文献として、『法苑珠林』、『集神州三宝感通録』、『冥報記』などがある。また、出典文献の記載ではないが、「新録」と明記した話も八話存在する。このように出典を示す割注がある場合も多いが、『法華伝記』では割注がない話が大多数を占める。しかし、割注の記載がない話であっ

ても出典が存在している場合が多いので、本章では各科の内容と引用関係について見てみたい。なお、引用関係については、「部類増減」から「論釈不同」までを見ていく。

『序』……七字四〇句の偈頌を最初に配し、その後ろに長行を配する。偈頌は、仏菩薩、十大弟子及び法華経を讃嘆する内容と、法華経の功德や願文のような内容が対句的表現を用いて書かれている。長行は主に『法華伝記』の編纂意図や構成について書かれている。なお、序は後序と密接な関連性を有している²⁵。「序」の引用関係については次のとおりである。

①「我撰經典護法城 哀愍覆護願加威 法灯不断長夜照 迷者因此得 仏慧」

↓智昇『開元釈教録』（大正蔵二二五四 四四七上）

「二 成立年代」を参照。

②「諸同遇者生慶幸 世世恒聞能修行 乃至見聞讚毀者 順逆俱證 無生忍」

↓湛然『止観輔行伝弘決』（大正蔵一九二二 二二六中一下）

「二 成立年代」を参照。

③『法華伝記』（四八下）

「鹿言軟語婦一義」

↓智顛『妙法蓮華経文句』（大正蔵一七一八 一六下）

「観鹿言軟語皆婦第一義」

④「抑祥宿殖所資妙因斯発。流通一乘。讚詠真文」

↓湛然『止觀輔行伝弘決』(大正蔵一九二二 二二六中―下)、湛然『法華文句記』(大正蔵一七一九 一五一中)

「二 成立年代」を参照。

⑤『法華伝記』(四八下)

「非籌算能測。妙利凝遯。亦繩準所知乎」

↓彦琮『唐護法沙門法琳別伝』(大正蔵二〇五一 一一二中)

「非籌算能測。至理凝遯。豈繩準可知寔乃常道無言。」

⑥『法華伝記』(四八下)

「各略引三五」

↓迦才『浄土論』(大正蔵一九六三 八九上)

「此礼讚文。第五引聖教。門中具顯。此略引三五。初門意也」

『部類増減』・・・部類が増減しても、隠れて見聞できない利や明

らからで見聞できる利が失われない例が七つあり、三身一体を説く法華経がその中で最も具足する経であるとする。普賢観では釈迦を毘盧遮

那遍一切處と名付け、四波羅蜜^②を建立するところとする。「如是」

に始まり「而去」で終わる法華経の一字一句で法界でないものはなく、仏でないものはない。上は舍那の功德から下は阿鼻の依正に至るまで、

不即不離であり、体具は微妙不可思議である。法華経の偈の数は多く、無尽の總持(陀羅尼)の力は書き表すことはできない。法華経は十方

三世の諸仏の智慧を歎じ、大事因縁を説いて、三乗の人を化し、一乗に開悟させる。長安に伝わる法華経には、正無畏(五千偈)、竺法護

(二万六千五百偈)、鳩摩羅什(三万六千偈)、闍那崛多(四万六千二

百偈)のものがあり、偈の数は増減があるとす。「部類増減」の引用関係は次のとおりである。

①『法華伝記』(四九上)

「略為七例。一者一會之經法用為一部。如十地等。二者多會共為一部。如華嚴等。三者經之初分用為一部。如六卷泥洹等。四者具足

二分為一部。如大涅槃等。五者略本以為一部。如小品經等。六者原本以為一部。如小品等。七者一品為一部。如觀世音經。今此法華。

於中是具足本。若依梵本。文底是略説。」

↓吉藏『法華義疏』(大正蔵一七二二 四五二上)

「略為七例。一者一會之經用為一部如十地等經。二者多會共為一部如華嚴之類。三者經之初分用為一部如六卷泥洹經。四者具足二分以

為一部如大般涅槃。五者略本以為一部如小品經等。六者原本以為一部如小品之流。七者一品以為一部如觀世音之例。今此法華於七種中是具足本。若依梵文底是略説有六千偈也。」

②『法華伝記』(四九上)

「普賢観云。釈迦牟尼仏。名毘盧遮那遍一切處。其仏佛住處名常寂光。」

↓吉藏『法華義疏』(大正蔵一七二二 六〇九下)

「普賢観云。釈迦牟尼名毘盧遮那遍一切處。其仏住處名常寂光。」

③『法華伝記』(四九中)

「説甄迦羅頻婆羅阿閼婆等偈。」

↓鳩摩羅什『妙法蓮華経葉王菩薩本事品』(大正蔵二六二 五一上)

「甄迦羅。頻婆羅。阿閼婆等偈。」

④ 『法華伝記』(四九中)

「以須弥山聚筆。大海水墨書。一一品一句偈。不可窮尽。」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正蔵二〇七三 一五三上)

「以須弥山聚筆大海水墨。書一一品。不可窮尽。」

⑤ 『法華伝記』(四九中)

「窮前後際。無有休息。唯是無尽總持力所持。非是翰墨之所能記。」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正蔵二〇七三 一五三上)

「窮前後際一切劫海。及一念具無辺劫。常説普説無有休息。唯是無尽陀羅尼力所持。非是翰墨之所能記。」

⑥ 『法華伝記』(四九中)

「又如真諦三蔵云。西域伝記説。龍樹菩薩逕海。龍宮見此法華平等摩訶衍経。有大千界微塵偈四天下塵數品。」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正蔵二〇七三 一五三上)

「如真諦三蔵云。西域伝記説。龍樹菩薩往龍宮。見此華嚴大不思議解脱経。有三本。上本有十三大千世界微塵數偈四天下微塵數品。」

⑦ 『法華伝記』(四九中)

「広略在器。部類増減。本法大義無虧矣」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正蔵二〇七三 一五三中)

「広略在器。本法無虧」

『隠頭時異』・・・『隠頭』とは「隠れたり現れたり。裏面と表面。

裏に隠れたものと、表に現れたもの」をいう。三種類の阿難がいて、

彼が高座に上ったとき、衆生には三つの疑いがあったが、経の初めに

「我聞」と付けることでこの疑いを取り除いたとする。しかし、その

後、誤った教えが蔓延して、正しい教えが隠没していった。そんな中、

龍樹は雪山中の宝塔にあった法華経を披閲し、龍王の宮で華嚴不可思

議解脱経の上本、中本及び下本を案内され、下本のみ閻浮提にあるこ

とを告げられる。また、于闐国や罽賓国にある法華経の話も掲載され

ている。「隠頭時異」の引用関係は以下のとおりである。

① 『法華伝記』(四九下)

「若依文殊師利般涅槃経。仏滅度後四百五十年。文殊師利猶在世

間。依智度論云。諸大乘経。是文殊結集。」、「仏去世後。賢聖隨隱。

如大象去子隨去。九十五道紛乱起。十八異師專崇小典。摩訶衍経多

分隠没。」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正蔵二〇七三 一五三中)

「依文殊般涅槃経。仏去世後。四百五十年。文殊師利猶在世間。

依智度論。諸大乘経。多是文殊師利之所結集。此経則是文殊所結。

仏初去後賢聖隨隱。異道競興。乏大乘器撰此経。」

② 『法華伝記』(四九下)

「若依集法伝。有三种阿難。阿難此云歡喜。持声聞蔵。阿難跋陀

此云歡喜賢。持独覚蔵。阿難迦羅此云歡喜海。阿難昇高衆生三疑。

一疑仏大悲從涅槃起既説妙法。二疑更有仏他方來住此説法。三疑彼

阿難轉身成仏為衆説法。今頭如是所説之法。我昔侍仏。二十五年親

所曾聞。非仏既起他方仏至轉身成仏。為除此疑故。諸経初皆言「我

聞。真諦三藏云。微細律明。阿難昇高集法藏時。身如諸仏。具諸相好。下座之時。還復本形。」

↓窺基『妙法蓮華經玄讚』(大正藏一七二二)

「集法伝云。有三阿難。一阿難陀云慶喜。持声聞藏。二阿難跋陀云喜賢。持獨覺藏。三阿難伽羅云喜海。」(六六三中)

「衆生三疑。一疑仏大悲從涅槃起更說妙法。二疑更有仏從他方來住此說法。三疑彼阿難轉身成仏爲衆說法。今顯如是所說之法我昔侍仏親所曾聞。非仏更起。他方仏至。轉身成仏。爲除此疑故經初言如是我聞」(六六二下—六六三上)

「真諦三藏云。微細律明。阿難昇座集法藏時。身如諸仏具諸相好。下座之時還復本形。」(六六二下)

③『法華伝記』(四九下—五〇上)

「有一梵士種。洞達四韋陀五明大義十八異經。名馳五天独歩諸国。名曰龍樹。捨邪歸正。九十日中議誦三藏既求深法無有得處。遂入雪山塔中。比丘以此經梵本授與龍樹。受誦愛樂。頗知実義。周遊諸国。広求餘經。於閻浮提遍求。不能具得。独在静室。水精房中思惟此事。大海龍王見而愍之。接八大海。於宮殿中發七宝函。以華嚴法華諸摩訶衍雲經太雲華手般舟諸方等深奧經無量妙法授之。龍樹受誦九十日。其心深入体得実利。龍王知其心問曰。誦經未不。答曰。汝諸函中經多無量。經劫不可尽。我所誦去。已十倍閻浮提經。龍王言。如我宮中所有經典。諸處此比不可数知。」

↓鳩摩羅什『龍樹菩薩伝』(大正藏二〇四七)

「九十日中誦三藏尽。更求異經都無得處。遂入雪山山中有塔。塔中有一老比丘。以摩訶衍經典與之。誦受愛樂。雖知実義未得通利。周遊諸国更求餘經。於閻浮提中遍求不得。外道論師沙門義宗咸皆摧伏。」(一八四中)

「独在静處水精房中。大龍菩薩見其如是惜而愍之。即接之入海。

於宮殿中開七宝藏。發七宝華函。以諸方等深奧經典無量妙法授之。龍樹受誦九十日中通解甚多。其心深入体得実利。龍知其心而問之曰。看經遍未。答言。汝諸函中經多無量不可尽也。我可誦者已十倍閻浮提。龍言。如我宮中所有經典。諸處此比復不可数。」(一八四下)

④『法華伝記』(五〇上)

「上本有十三世界微塵数頌四天下微塵数品。中本有四十九万八千八百偈一千二百品。下本有十万頌三十品。」

↓法藏『華嚴経伝記』(大正藏二〇七三—一五三中)

「有三本。上本有十三大千世界微塵数偈四天下微塵数品。中本有四十九万八千八百偈一千二百品。下本有十万偈四十八品。」

⑤『法華伝記』(五〇上—中)

「龍樹既得一箱。深入無生。龍樹逆出於南天竺。大弘仏教。摧伏外道。広摩訶衍。作三部大論千部別論。」

↓鳩摩羅什『龍樹菩薩伝』(大正藏二〇四七—一八四中—下)

「龍樹既得諸経。相深入無生。二忍具足。龍還送出於南天竺。大弘仏法摧伏外道。広摩訶衍作優波提舍十万偈。」

⑥『法華伝記』(五〇中)

「昔于闐王宮有法華梵本。六千五百偈。東南二千餘里。有國名遮
[牛扁十句]槃国。彼王累世敬重大乘。諸国名僧入其境者。皆試其解。
若小乘学則遣不留。大乘人請綺供養。王宮亦有華嚴大集摩訶般若法
華大涅槃等五部大經。並十萬偈。王躬受持。親執戶籥。轉読則開。
香華供養。又東南二十餘里。有山甚嶮難。峰上有石窟。口狹內寬。
其內華嚴大集方等宝積楞伽方広舍利弗陀羅尼華聚陀羅尼都薩羅摩訶
般若大雲法華。凡一十二部。皆十萬偈。国法相伝防護守掌。」

↓法藏『華嚴經伝記』（大正藏二〇七三 一五三中 下）

「昔于闐東南二千餘里。有遮拘槃国。彼王歷葉敬重大乘。諸国名
僧入其境者。竝皆試練。若小乘学則遣不留。摩訶衍人請停供養。王
宮內自有華嚴摩訶般若大集等經。竝十萬偈。王躬受持。親執戶籥。
転読則開。香華供養。又於道場內。種種莊嚴。衆宝備具。并懸諸雜
幡。時非時果。誘諸小王令人禮拜。又此国東南。可二十餘里有山甚
嶮。其內置華嚴・大集・方等・宝積・楞伽・方広・舍利弗陀羅尼・華聚陀
羅尼・都薩羅藏・摩訶般若大雲等。凡一十二部。皆十萬偈。国法相伝。
防護守掌。」

⑦ 『法華伝記』（五〇中）

「當知依機有生熟。隱顯時異。若依法住記。仏薄伽梵般涅槃時。
以無上法。付嘱十六大阿羅漢并眷属。並令其護持。使不滅没。十六
阿羅漢。護持正法饒益有情。此州人寿極長至於十歲。仏法暫滅没。
後人寿漸增至四万歲位。阿羅漢俱來人中。顯說正法。乃至六万歲時。
無上正法流行世間。熾盛無息。至七万歲時。無上正法方永滅没。」

↓道世『法苑珠林』（大正藏二二二二）

「汝粗更言說。仏薄伽梵般涅槃時。以無上法付嘱十六大阿羅漢并
諸眷属。令其護持使不滅没及勅其身與諸施主作真福田。」（五二二下—
五二二上）

「如是十六大阿羅漢。護持正法饒益有情。至此南瞻部洲人寿極長。
至於十歲刀兵劫起互相誅戮。」（五二二中）

「如是乃至此洲人寿六万歲時。無上正法流行世間熾然無息。後至
人寿七万歲時。無上正法方永滅没。」（五二二中）

なお、『法苑珠林』には出典として玄奘著『大阿羅漢難提蜜多羅所
說法住記』（大正藏二〇三〇）と書かれている。確かに『大阿羅漢難
提蜜多羅所說法住記』には『法苑珠林』と同様の文章があるが、『法
華伝記』と『法苑珠林』で「寿極長至於十歲」とあるところを、『大
阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』では「寿極短至於十歲」（一三中）と
しているため、『法華伝記』は『法苑珠林』を参考に文章を作成した
と判断した。

『伝訳年代』・・・前半は、六種の法華經、すなわち沙門道馨訳
『法華三昧經』六卷、曇摩羅蜜（竺法護）訳『薩芸芬陀梨法華經』六
卷、竺法護訳『正法華經』十卷、沙門支道林訳『方等法華經』六卷、
鳩摩羅什訳『妙法華經』七又は八卷、沙門笈多崛多訳『添品法華經』
七卷について記述する。後半（五一上以降）は鳩摩羅什の伝記であり、
これを「僧伝及別伝経録等」によって書いたと謳っているが、大半は
『高僧伝』からの引用である。「伝訳年代」の引用関係は次のとおりで

ある。なお、本科後半部分の鳩摩羅什の伝記の引用関係については、紙片の都合上割愛する。

①『法華伝記』(五〇中)

「經序云。考驗護什二訳。定非一本。護似多羅葉。什似龜茲之文。而護所闕者。普門品偈。什所闕者。藥草喻品之半。富樓那及法師等二品之初。提婆達多品。普門品偈也。什又移囑累。在藥王之前。二本陀羅尼。並置普門之後。其間異同。言不能極。普曜寺沙門上行所請。遂共三藏幅多笈多二法師。於大興善寺。重勸天竺多羅葉本。富樓那及法師等二品之初。勸本猶闕。藥草喻品。更益其半。提婆達多。通入宝塔品。陀羅尼神力之後。囑累還結其終。千万億偈妙義難尽。」
↓閣那幅多共笈多『添品妙法蓮華經序文』(大正藏二六四 一三四下)
「考驗二訳。定非一本。護似多羅之葉。什似龜茲之文。余撿經藏。備見二本。多羅則與正法符合。龜茲則其妙法允同。護葉尚有所遺。什文寧無其漏。而護所闕者。普門品偈也。什所闕者。藥草喻品之半。富樓那及法師等二品之初。提婆達多品。普門品偈也。什又移囑累。在藥王之前。二本陀羅尼。並置普門之後。其間異同。言不能極。竊見提婆達多。及普門品偈。先賢統出。補闕流行。余景仰遺風。憲章成範。大隋仁壽元年辛酉之歲。因普曜寺沙門上行所請。遂共三藏幅多笈多二法師。於大興善寺。重勸天竺多羅葉本。富樓那及法師等二品之初。勸本猶闕。藥草喻品更益其半。提婆達多通入塔品。陀羅尼次神力之後。囑累還結其終。字句差殊。頗亦改正。儻有披尋。幸勿疑惑。雖千万億偈妙義難尽。」

②『法華伝記』(五一上)

「什師一代所翻之經。至今若新。受持轉盛何耶。答曰。其人聰明善解大乘。以下諸人。並皆後人一代之宝也。絶後光前。仰之不及。故其訳経以悟達為先。得仏遺記之高位在三賢。」

↓道世『法苑珠林』(大正藏二二二 三九六上)

「什師一代所翻之経。人多偏樂受持轉盛何耶。答曰。其人聰明善解大乘。以下諸人同時訳訳者並。俊又一代之宝也。絶後光前仰之所不及。故其所訳以悟達為先。得仏遺寄之意也。又問。俗中常論。被秦姚興抑破重戒。云何得仏意耶。答曰。此非悠悠凡所霽度。何須評論。什師德行位在三賢。」

『支派別行』・・・『支派』とは「根源的なものに対する末梢的なもの」²³⁾、「別行」は別教の行または別に単行本にすること²⁴⁾を意味する。支派として『無量義経』と『観普賢行法経』を挙げ、別行として法華経「譬喻品」の同本として魏・支謙訳『三車喚子経』一卷、法華経「普門品」の同本として西晋永嘉二年(三〇八)竺法護訳『光世音経』一卷ほか計五つの観音経を挙げる。また、「提婆達多品」も法華経の別行とする。さらに、法華経「序品」及び「寿命品」の同本として『法華光瑞菩薩現瑞経』が挙げられ、曇摩羅懺の伝記を短く載せ、最後に『法華三昧経』、『薩曇分陀利経』、『高王観世音経』について触れる。「支派別行」の引用関係は以下のとおりである。

①『法華伝記』(五二下)

「高帝世建元二年。天竺沙門曇摩伽陀耶舍。齊言法生称。於広州

朝亭寺。手自訳出。伝受人沙門慧表。永明三年。齋至楊都。」

↓道宣『大唐内典録』（大正蔵二一四九 一六二上）

「高帝世。建元二年。天竺沙門曇摩伽陀耶舍。齐言法生称。於広朝亭寺手自訳出。伝授人沙門慧表。永明三年齋至揚都繕写流布。」

②『法華伝記』（五二下）

「蕭齐永明年。沙門法獻。于闐国得梵本来。與宝意於揚州瓦官寺訳。」

↓明佺等『大周刊定衆経目錄』（大正蔵二一五三 三八五下）

「右蕭齐永明年。沙門法獻于闐国得梵本来。請法獻於揚州瓦官寺訳。」

③『法華伝記』（五二下）

「曇摩羅讖。此云法豊。中印人婆羅門種。亦称伊波勒菩薩。弘化為志。遊化葱嶺。来至河西。河西王沮渠蒙。帰命正法。兼有疾患。以語菩薩。即云。觀世音此土有縁。乃令誦念。病苦即除。因是別伝一品。流通部外也。」

↓智顛説・灌頂記『観音玄義』（大正蔵一七二六 八九二下）

「乃是曇摩羅讖法師亦号伊波勒菩薩。遊化葱嶺来至河西。河西王沮渠蒙遜帰命正法。兼有疾患以告法師。師云。觀世音與此土有縁。乃令誦念患苦即除。因是別伝一品流通部外也。」

『論釈不同』・・・法華経の論及び釈についての真諦三蔵の説が書かれている。仏涅槃後五百年で龍樹が『法華論』を著し、六百年で堅意菩薩が『釈論』を著すが、それらは中国には伝来せず、涅槃後九百

年に婆藪槃豆が『法華論』著し、勒那摩提と菩提流支が『法華経論』を著したことが書かれている。「論釈不同」の引用関係は以下のとおりである。

①『法華伝記』（五三上）

「釈其大義。中印度沙門勒那摩提。魏云宝意。学識優瞻理事。兼通三蔵。凡誦一億偈。偈有三十二字。意存遊化。以宣武帝正始五年戊子。初届洛邑。訳法華論爲一卷。侍中崔光沙門僧朗等筆受。当翻経日。於洛陽内殿。菩提流支伝本。勒那扇多參明其後。三徳乃徇流言。各伝師習。不相詢訪。帝以弘法之盛。略叙曲煩勅三處。各翻詔乃參校其間隱没。互有不同致者。文旨時兼異綴。後人合之。共成通部。又北印度沙門菩提流支。此云道希。新云覺愛。遍通三蔵。妙入總持。志在弘法。広流視聽。遂挾道胥征。遠位葱左。以魏永平之歲。至止東華。宣武下勅。懇勲敬勞。後處之永寧大寺。供待甚豊。七百梵僧。並皆周給。勅以流支。為訳経之元匠也。」

↓智昇『開元釈教録／附 入蔵目錄』（大正蔵二二五四）

「二 成立年代」を参照。

『諸師序集』・・・種々の法華の序文が書かれ、それぞれ出典となるの文章をそのまま抜き書きしている場合が多い。「諸師序集」の引用関係は以下のとおり。

「法華宗要序」・・・『出三蔵記集』（大正蔵二二四五）「法華宗要序第八」（五七上一中）

「法華經後序」・・・『出三藏記集』「法華經後序第九」（五七中一下）

「法華經序」・・・円智により削除されている（内容は、「一撰者」を参照）

「法華翻經後記」・・・出典不明

「添品法華序」・・・『添品妙法蓮華經』（大正藏二六四）「添品妙

法蓮華經序」（一三四中一下）

「無量義經序」・・・『出三藏記集』「無量義經序第二十二」（六八上一下）

「正法華經記」・・・「太康七年八月十日。燉煌月支菩薩」の部分

は『出三藏記集』「正法華經記第六」（五六下）を引用しているが、それ以外の大部分は「毘摩羅詰埤經義疏序第十四」（五九上）を抜書きしている。

『講解感応』・・・「講解」、すなわち、説明し解釈することにより仏菩薩がそれに応えるという内容の題名である。七之一と七之二の二章、全十九話で構成されており、主人公は全て僧である。なお、『華嚴經傳記』では上下二章の構成、『弘誓法華傳』では一章の構成である。

『諷誦勝利』・・・「諷誦」とは、「經典を暗誦すること。經文を唱えること。節をつけて暗誦すること。節をつけて經文を読むこと」³⁰⁾である。諷誦することで得られる勝れた利益という内容の題名である。『法華傳記』は諷誦勝利に多くの紙数を割いており、八之一

から八之四までの四章、全九三話を掲載する。八之一と八之二は僧を主人公とするが、八之三と八之四は僧の他に尼や優婆塞・優婆夷の話も含まれる。なお、諷誦については、『華嚴經傳記』は一章、『弘誓法華傳』は「誦持」で三章を構成している。

『転読滅罪』・・・「転読」とは、一つの經典全体を通読すること「真読」に対し、単に経題や経の初・中・終の數行を略読することという³¹⁾。転読することで滅罪に繋がるという題名であり、全十六話を掲載し、その殆どが僧尼以外の信者層を主人公とする。転読については、『華嚴經傳記』と『弘誓法華傳』にもそれぞれ一章ずつ掲載されている。

『書写救苦』・・・「書写」とは、經典を書き写すことであり、書写することで苦から救われることを意味する題名が付されている。全三四話掲載され、主人公は大半が優婆塞等の信者層である。書写も『華嚴經傳記』と『弘誓法華傳』それぞれ一章ずつある。

『聴聞利益』・・・「聴聞」とは、經典が読まれるのを聞くことであり、聴聞することで利益が得られる旨の題名である。聞くだけなので獸等の異類でも恩恵に預かることができ、『法華傳記』の中で最も特徴的な科である。このことを反映して、全三二話中九話が異類譚で占められている。

『依正供養』・・・「依正」（えしょう）とは、依報と正報の略で、正報は主体たる身であり、依報はその身の拠り所となる環境のことである³²⁾。依報と正報により供養するという題名であり、全十七話掲載

『法華伝記』の撰者と成立年代について

一四

されていて、内容はほとんどが焼身往生譚である。

『後序』・・・『法華伝記』には、最終巻に後序が付せられており、左のような長行と偈頌で構成される。

「上来已依西域伝記。此土賢聖見聞撰集。梗概而記。其中或有相伝無文。或見親聞自新録之。雖恐本記虚実。意在勸後信矣

已依旧記及口伝 現見親聞略撰集

麁言細語帰中道 見聞俱証無生忍」（九六下―九七上）

長行の「已依西域伝記。此土賢聖見聞撰集」と偈頌の「已依旧記及口伝」は「已依」という共通の単語で括られた同じ表現であり、「西域伝記」を偈では「旧記」と表現し、「此土賢聖見聞」を「口伝」と表現していることがわかる。内容は、『法華伝記』を「西域伝記（旧記）」と「此土賢聖見聞（口伝）」によって撰集した旨が書かれている。ここに言う『西域伝記』とはどのような書であるか不明だが、開皇十四年（五九四）に成立した『衆経目錄』（大正藏二一四六）中に「西域聖賢伝記一 合一十三部三十卷」（一四六上）とある。もしかすると『西域伝記』は『西域聖賢伝記』を指すのかもしれないが、『西域聖賢伝記』が現存していないため、容易には判断できない。『西域伝記』は『法華伝記』中に数回登場し^⑧、唐僧祥公の手元にそれがあつたことは確実であろう。

おわりに

『法華伝記』は、その重要性が認知されながら、不明な点が多い書である。そこで、本稿では特に『法華伝記』の撰者、成立年代、内容と引用関係について論じてきた。

『法華伝記』の撰者について、現在通用している「僧詳」という名は『法華伝記』の本文の記載を見ると妥当ではなく、また、『法華伝記』と密接な関係にある『弘賛法華伝』の撰者慧祥との関係については、『法華伝記』が引用する文献が『弘賛法華伝』よりも『高僧伝』や『続高僧伝』からの引用の方が多いという理由から、『弘賛法華伝』の撰者慧祥とは別人であると述べた。そして、本稿では『法華伝記』の撰者を本文の記述に従って唐代の僧である「某祥」の後ろの一字をとった「祥」というのが妥当であると結論付けた。

成立年代については、「序」及び「論釈不同」に書かれている文章の引用関係を根拠に論じ、有力説の天宝末年（七四二―七五六）ではなく、智昇著『開元釈教録』との関係から開元十八年（七三〇）以後の成立であり、湛然著『止観輔行伝弘決』と同『法華文句記』からの引用も認められるため、『法華伝記』の成立年代は『止観輔行伝弘決』が成立した永泰元年（七六五）、または『法華文句記』が成立した大暦九年（七七四）まで下る可能性を示した。

第三章では各科の内容の概略を示し、「序」から「論釈不同」までは引用関係を提示した。現在、「講解感応」以降の話の典故について

研究を進めているところであるが、割注による出典の記載がないものであっても、どこかに出典となる話が存在しているケースが多い。一方で出典が全く存在しない話もいくつか確認できており、出典不存在の話の主人公がいつの時代の人物なのかを検討することにより、成立年代がもっと新しくなる可能性もあるのではないかと考えている。その検討結果については、別稿で論じたいと思う。

《註》

- 1、鎌田茂雄『中国仏教史辞典』（東京堂出版、一九八一年）。
- 2、註（1）に同じ。
- 3、『大蔵経全解説辞典』（雄山閣、平成十年）。
- 4、渋谷亮泰『昭和現存 天台書籍綜合目録 下 増補版』（法蔵館、一九七八年）。
- 5、真福寺本『法華伝記』は、書名を『法花経伝』といい、重要文化財に指定（指定番号〇二二八—〇七 一九六四年一月二八日指定）されている。
- 6、拙稿『法華験記』と『法華伝記』との関連性をめぐって—巻末偈頌をめぐって—（投稿中）
- 7、羽溪了諦『法華伝』の著者に就いて（『六條学報』一三六、一九一三年）。
- 8、小笠原宣秀「藍谷沙門慧詳に就いて」（『龍谷学報』三二五、一九三六年）。
- 9、伊吹敦「唐僧慧祥に就いて」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』一四、一九八八）
- 10、註（1）の撰者名のほかに『中国仏教史研究』（岩波書店、一九七九年）でも僧詳撰とする。
- 11、跋文には「慶長庚子載季春望日」とある。
- 12、本文中の「祥」の使用は、「抑祥宿殖所資妙因斯發」（四八下）、「宜祥盛降歴代弥新」（五一上）、「祥親所見聞也」（七五下）である。
- 13、註（8）に同じ。
- 14、註（7）に同じ。
- 15、註（8）に同じ。

- 16、註（9）に同じ。
- 17、諷誦勝利では九三人中二十四人が『弘誓法華伝』にも掲載されている。特に諷誦勝利八之二は三十人中十五人が共通していて、さらに登場する順番も『弘誓法華伝』と同様である。
- 18、「体具」は「性具・理具」とも言い、「天台宗の教義で、いかなる有情でも、その本覚の性に十界三千の善悪のあり方が具わっていること。生きとし生けるものが菩薩界以下九法界の善悪三千お諸法を具えていること」（註（27）に同じ）という意味である。また、「現代語訳 法華辞典」（註（32）に同じ）では「二念三千の教学上重要な語。三千の諸法即ち万有は、我等本来の心性に具して居るばかりでなく、凡ての物質にも、理性として先天的に具わっているということ」としており、天台教学上非常に重要な用語であることがわかる。
- 19、註（7）に同じ。
- 20、註（3）に同じ。
- 21、池麗梅『唐代天台仏教復興運動研究序説—荊溪湛然とその『止観輔行伝弘決』』（大蔵出版、二〇〇八年）。
- 22、註（3）に同じ。
- 23、的場慶雅「中国における法華経の信仰形態（一）—法華伝記—」（『印度学仏教学研究』三一—一（印度学仏教学会、一九八二年））。
- 24、小笠原（註（8））は『法華伝記』と『華嚴経伝記』の配列順序の類似性について言及する。
- 25、註（6）に同じ。
- 26、「四波羅蜜」とは「ニルヴァーナに具わっている常波羅蜜（常住の完成）・樂波羅蜜（至福の完成）・我波羅蜜（自我の完成）・浄波羅蜜（清浄の完成）の四つをいう」（註（27）に同じ）
- 27、中村元『仏教語大辞典』（東京書籍、一九八一年）。
- 28、註（27）に同じ。
- 29、註（27）に同じ。
- 30、註（27）に同じ。
- 31、註（27）に同じ。
- 32、「現代語訳 法華辞典」（山喜房仏書林、一九二七年）。
- 33、「西域伝記」は二回（四九中、四九下）、「西域伝」は一回（七三中）登場する。